



その3

万葉集から読み解く古植生

兵庫県立南但馬自然学校

学長（兵庫県立大学 名誉教授）

服部保

歴史時代の植生を推定する手法としては、花粉・植物遺体・プラントオパールなどの分析、絵図・絵画・古写真・迅速図などの解析、江戸時代の検地帳・検地絵図・明細帳などの解析、公家や僧侶の日記類の比較、万葉集・風土

記などの古典の解析などが挙げられる。なかでも十分な文書や絵画等の残されていない古代においては、その時代に記された古事記、日本書紀、風土記、万葉集は古代の植生を探る重要な資料となり得る。特に奈良時代に編纂された万葉集には、藻類、菌類も含めて約160種の植物が植物の生育立地や共存種と共に約1600首も詠まれており、奈良時代の植生を推定するのに非常に有効な資料と考えられる。万葉集に詠まれている植物（万葉植物）については多数の国学者や本草家・植物分類学者によって研究されてきたが、万葉集を用いた奈良時代の植生研究はほとんど行われていない。本論文では服部ほか（2010）の研究成果を土台に、里山林の比較という新たな視点を加えて、万葉時代の植生景観について考察したい。

万葉植物は自然の実態を示しているのか

万葉植物より植生を推定するにあたって、万葉集の自然描写の正確さがまず問題となる。植物の「種」と「種」の組み合わせと植物の「種」と「地形単位」の組み合わせの検証により正確さを評価する。

同首内に詠まれているハギ属とススキ、ハギ属とオミナエシ、ハギ属とチガヤ、ススキとネザサ、ヨシとオギ、ハンノキとカササゲ類などの組み合わせをみると、いずれも現在のススキ草原、夏緑二次林（落葉広葉二次林、里山林）、ハンノキ林、水田などの各群落における構成種の一部に一致している。さらに、ススキとナンバンギセル、マツとマツタケなどをみると、同首内の2種は適当に組み合わせられたものではなく、実在する群落の種組成を反映したものであり、種の組み合わせの妥当性からみると万葉集では自然の実態を詠んでいと認められる。山上憶良による「秋の七種（ななくさ）」の歌（8—1537、1538）にはハギ、ススキ、キキョウ、オミナエシ、カワラナデシコ、クズ、フジバカマの7種の植物が詠まれているが、これらの植物はまさにススキ草原の構成種であって、万葉集の自然描写の精度が高いことを示すものである。

セリ・イヌビエ・コナギと「田」、ハギ属・ススキ・チガヤ・ハンノキなどと「野」（野は草地を示す語ではなく、平坦な地形を指す。排水の悪い平坦な湿地にハンノキは生育し、乾燥気味の立地にススキ等が広がる）、ヨシと「河口」、アカメガシワと「河原」、ノイバラ・シバと「道」（路傍）などの組み合わせについても植物2種の組み合わせと同様に、適当に組み合わせられたのではなく、実在する群落とその立地条件が正確に組み合わせられたものといえる。以上により、万葉集は奈良時代の植生を推定する資料としての価値は十分であると認められる。

解析手順

① 群落単位の抽出

万葉植物の標準和名（図鑑等で一般的によく用いられている和名・必ずしも統一されているわけではない。）を確定し、それらの植物などより構成されている群落単位を判定した。各植物の詠まれている歌数をもとに、各群落単位が詠まれている歌数を算出した。各群落単位の歌数の多少は万葉時代の植生面積の大小か、万葉人の植生への関わりや好みの程度を反映しているものと考え、各群落単位の歌数の比較によつ

て奈良時代の植生分布を明らかにしたい。

手順としては、万葉集校注書（中西 1978、1980、1981、1983）をもとに歌だけではなく題詞、左注等も含めて万葉植物を検索し、万葉植物解説書（松田 1970・木村 1988・細見 1992・山田・中嶋 1995・木下 2010）を参考に、「あからがし」はアカメガシワ、「しらかし」はウラジロガシのように万葉植物名の標準和名への確定を行った。その結果、海藻類・不明種を除くハギ属、コウゾ、ウメ、ヒオウギなど、148種の植物（菌類1種を含む）を確認した。その際に、浜と共に詠まれている「まつ」はクロマツに、内陸の「まつ」はアカマツに、海に近い立地（海原 うなはら）の「すげ」はシオクゲに、砂丘の「かほがはな」はハマヒルガオに推定するなど生育立地や共存種に注目して標準和名を確定した。確定した148種の植物について詠まれている歌数を算出した。

植物社会学上の群落単位および外観による植生名や土地利用については大場（1982）、宮脇ほか（1983）などを参考に、148種の植物が属している群落単位を「ススキ」はスキクラス（採草・放牧草原）、「ノイバラ」はノイバラクラス（林縁植物群落）、「アカメガシワ」はアカメガシワークサギ群団（先駆低木林）、「ウラジロガシ」はヤブツバキクラス（照葉樹林）などのように判定した。群落単位は最上級の階級であるクラス（種を基本単位とし、上位に向かって属、科、目、綱、門、界の階級によって

統合される生物分類のように、群落分類では群集を基本単位として、上位に向かって群団、オーダー、クラスの階級に統合される。）をできるだけ採用したが、クラスに該当しない場合はクラス以下の階級であるオーダー、群団、群集を採用した。水田、畑地、庭園植物等はそれらの土地利用名を用いた。

②夏緑二次林、神社林

（照葉準自然林）を示す用語

植物名ではないが、黄葉（もみち）・紅（くれなる）・黄葉（もみちば）・色づきなどの用語は山が紅葉している状態、すなわち夏緑樹（落葉樹）の存在を示している。黄葉等によってコナライヌシデ群団（夏緑二次林）が詠まれているとみなし、それらの用語が用いられている歌を検索し、歌数をまとめた。

同様に、神社の森を意味する用語「神社（もり）、社（もり、やしろ）、三諸など」の詠まれている歌数を調べ、それらはヤブツバキクラス（照葉準自然林）が詠まれているとみなした。

③照葉樹林の区分

照葉樹林（総称）は原生状態にある照葉樹林（照葉自然林）、自然性がやや高く、社寺に保全されている照葉準自然林、薪炭林として利用されている照葉二次林（照葉里山林）の3樹林に区分される（服部ほか 2020）。土地利用からみると水田・畑・人家の存在する「人里」、里をとりまき薪炭を供給する「山」（里山）、人の立ち入りが無い「奥山」に区分できる（岩槻

2010）。「奥山」と照葉樹林構成種および「山」とスギ、ヒノキ、イチイガシ、スギ・ヒノキ類との組み合わせは照葉樹林（照葉自然林）、「社、三諸」などと照葉樹林構成種との組み合わせは照葉準自然林、「山」とスギ、ヒノキ、イチイガシを除く照葉樹林構成種との組み合わせは照葉二次林が詠まれていると考え、3樹林の歌数をまとめた。なお、スギ・ヒノキは、現在では人工林の代表種であり、人の手の加わった状態の指標であるが、古代においては人の手の加わっていない照葉樹林や夏緑樹林の構成種であったので（服部ほか 2020）、スギ・ヒノキの低地での分布は照葉樹林（照葉自然林）の存在を示していることになる。

万葉の植生景観

①植生景観の概要

万葉集には148種の植物が1654首に詠まれていた。148種の中には、「まゆみ」、「むらさき」のように弓や染料などの製品等の名称や、「あかねさす」や「ぬばたま」のような枕詞として用いられる用語であって、植物そのものを示していない名称もある。これらの植物や歌を除くと138種、1259首となる。138種の属する群落単位を調べ（表1）、歌数の多い順に群落単位をまとめると、スキクラス（306首）、庭園植物群（250首）、ヤブツバキクラス（136首）、コナライヌシデ群団（125首）、ヨシクラス（107首）、ノイバラクラス（57首）、クロマツ林（56首）と続く（表2）。自然植生としてはヨシクラス

表1. 万葉植物の標準和名, 歌数, およびそれらの植物が所属する群落単位名の一例.

標準和名	万葉植物名	歌数 ¹⁾	群落単位名・他
ハギ属	はぎ	143	ススキクラス
ウメ	うめ	119	庭園植物群
クロマツ	まつ	56	人工植生 (クロマツ林)
イネ	いね, わせ, なへ, ほ, ゆだね	47	人工植生 (水田)
ヨシ	あし	45	ヨシクラス
チガヤ	あさぢ, ち, ちばな, ちがや	27	ススキクラス
コジイ	しひ	3	ヤブツバキクラス
.	.	.	.
.	.	.	.
.	.	.	.

1): 植物そのものではない弓, 染料, 衣料などの製品, 加工品等を除く歌数.

表2. 群落単位別の歌数と植物種数 (植物そのものではない弓, 染料, 衣料などの製品, 加工品等を除く).

群落単位名・土地利用 (相観植生名ほか)	歌数・植物種数	立地条件
ススキクラス (採草・放牧草原)	306 (18)	里山 (人里)
庭園植物群	250 (12)	人里
ヤブツバキクラス (照葉樹林・総称)	136 (21)	奥山 (里山)
コナライヌシデ群団 (夏緑二次林)	125 (17)	里山
ヨシクラス (河川草原)	107 (9)	.
ノイバラクラス (林縁植物群落)	57 (10)	人里
クロマツ林 (人工植生)	56 (1)	人里
水田 (人工植生) + イネクラス (水田雑草群落)	53 (4)	人里
アカマツ群団 (針葉二次林)	41 (6)	里山
畑地 (人工植生)	24 (10)	人里
ハンノキクラス (湿地林)	17 (2)	.
マダケ・ハチク林 (人工植生)	16 (1)	里山
ヨモギクラス (路傍植物群落)	13 (7)	人里
エノキームクノキ群団 (堤防等夏緑二次林)	11 (4)	.
アカメガシワークサギ群団 (先駆低木林)	11 (3)	里山
シロザクラス (畑地雑草群落)	11 (2)	人里
ヒルムシロクラス (池沼植物群落)	9 (5)	人里
タウコギクラス (水辺植物群落)	7 (2)	.
オノエヤナギクラス (河川林)	4 (1)	.
ブナ・ササオーダー (夏緑樹林)	2 (2)	奥山
ハマゴウクラス (海浜低木林)	1 (1)	.
ハマボウフウクラス (海浜草原)	1 (1)	.
シオクグ群集 (塩沼地草原)	1 (1)	.
合計	1259	138
植物種数の合計は 140 種 (2 種は重複)		

る。ススキクラス、コナライヌシデ群団の歌数が多いのは面積の広い里山の植生であることを反映していると考えられる。しかし、ススキクラス (採草・放牧草原) とコナライヌシデ群団 (夏緑二次林) を比較すると、燃料林のコナライヌシデ群団の面積がより広大であったと推定されるにもかかわらず、ススキクラスの歌が一位であるのは秋の七種に代表される美しい開花植物や開放的な景観性を万葉人が好んで取り上げたからである。ヨシクラスは河川等に限定される小面積の群落単位であるが、歌数は107と面積の広い水田よりも上位の5位である。ヨシクラスも草原であるので、ススキクラスと同様に開放的であり、眺望性に富んだ植生景観が好まれたのであろう。

(107首)、ヤブツバキクラスの1部(32首)、ハンノキクラス(17首)、オノエヤナギクラス(4首)、ブナ・ササオーダー(2首)、ハマゴウクラス・ハマボウフウクラス・シオクグ群集(各1首)で残りは代償植生(人の手が加わった植生)である。

植物名以外に因る植生の存在を示すものとして、黄葉等によるコナライヌシデ群団(68首)、神社(もり)・社(もり)等によるヤブツバキクラス(54首)がある。表2の結果にこれら二つの歌数を加えると、コナライヌシデ群団が193首、ヤブツバキクラスが192首となつて3位と4位が入れ替わる。

② 人里―里山―奥山

万葉集では、ほとんどの歌は「照葉樹林」のように暖温帯・低山帯・ヤブツバキクラス域で詠まれており、冷温帯・山地帯・ブナクラス域ではほとんど詠まれていないこと、自然植生よりも採草・放牧草原、里山、耕作地などの代償植生が多く詠まれていること、里山では後述するように夏緑二次林が優占していたことなどが表2によってよく示されている。

奈良時代においては低地に集落や耕作地の広がる「人里」が開け、里の周りに燃料・肥料・飼料の採取地である「山(里山)」、里山の奥深

くに人によって土地利用されておらず、自然植生の分布する「奥山」という土地利用のモデルが存在したと考えられる。「人里」には庭園植物群、ノイバラクラス、水田+イネクラス、畑地、ヨモギクラス、ススキクラスの1部、シロザクラス、ヒルムシロクラス、「里山」にはススキクラスの大部分、コナライヌシデ群団、アカマツ群団、アカメガシワークサギ群団、「奥山」にはヤブツバキクラスの大部分、ブナ・ササオーダーが成立していたと考えられる。万葉集の舞台となった暖温帯・低山帯・ヤブツバキクラス域に限ると、近畿地方では「里山」の面積が広く、「人里」、「奥山」の順と考えられる。

③里山の植生

弥生時代以降、暖温带・低山帯では自然林が破壊された後、燃料供給用の里山が育成される。里山では照葉自然林の破壊後、照葉二次林が成立した後に夏緑二次林へと移行し、さらに室町時代になるとアカマツ二次林、江戸時代にはアカマツ二次林の一部はげ山へと遷移したと考えられる。照葉二次林から夏緑二次林へと遷移した年代は不明とされている（服部ほか 2020）。

万葉集における照葉樹林（総称）は植物によって136首、神社等によって54首、合計190首詠まれている。照葉樹林構成種の記されている136首を対象に、解析手順の③に示した「照葉樹林の区分」の手法に基づくと、照葉自然林は30首、照葉準自然林は17首、照葉二次林は31首、各種照葉型樹林は58首に区分された。

万葉の植生景観の①に示したように夏緑二次林（コナライヌシデ群団）は192首、アカマツ二次林（アカマツ群団）は41首、照葉二次林は31首となり、二次林の中では夏緑二次林がもっとも多い。紅葉を詠んだ歌の中に勅撰和歌集のみみぢの様に、特に紅葉を愛でるといった歌が少ないので、歌数の多少は面積を反映していると考えた。以上により万葉時代の和を中心とした地域の里山景観はアカマツ二次林、照葉二次林を含むものの夏緑二次林の優占によって特徴づけられていたと考えられる。このような結果は、アカマツ二次林の優占が平安時代末期から室町時代とする貴族の日記の解析結果

（千葉 1973）や花粉分析結果（佐々木ほか 2011）とも矛盾していない。照葉二次林から夏緑二次林への移行の時代は奈良時代以前であることも明らかになったといえる。

④万葉時代の草原

草原は自然草原、二次草原を含めて合計425首詠まれており、前述したように万葉人の草原への愛着性は強く、秋の七種の歌が現在もよく取り上げられているように、草原に対する嗜好性は現代人にも受け継がれている。頁数の関係で、草原の中でチガヤ草原のみを取り上げる。チガヤは「あさぢ」「浅茅、草丈の低い茅（ち）」などとして27首も詠まれている。「あさぢ」は刈敷用（肥料）の緑肥、飼料などの採取を目的に年数回刈り取られた結果生じたチガヤの生育形であり、古典の解説によく記されているような単に草丈が低いとか、まばらに生育しているチガヤを指すものではない。万葉集では「あさぢはらに標を結う」や「あさぢを刈る」などの語句が詠まれていることから分かるように、万葉人は人の利用の下に「あさぢ」「あさぢはら」が成立していることをよく理解しており、その上で「あさぢ」を恋人に例えたり、遊びの道具にするなどの親しみのある歌が詠まれている。平安時代以降、勅撰和歌集や源氏物語に記されているように、「あさぢ」は荒れた状態の草原や庭の雑草群を示す用語となったが、それはチガヤの実態・生態を知らない貴族が誤ったイメージだけを受け継いだことよっている。平安時代の和歌集や物語では「あさぢ」

という用語の中に実態とは異なるチガヤの放置草原像が示され続けることになる。

勅撰和歌集等ではチガヤだけではなく、他の植物についても実態が詠まれている歌は少なく、残念ながらそれらを資料として当時の植生の推定はできず、この点からも万葉集の重要性が理解できる。

万葉集においては、文学を始めとし歴史学、民俗学、国語学、宗教学、地理学、生物学などの様々な分野から広く研究されてきたが、今回奈良時代の植生景観や群落分布といった植生学の分野においても重要な文献であることが明らかとなった。標準和名を確定できなかった万葉植物や群落単位が不明瞭な植物もあり、今後万葉植生学を確立したい。

参考文献

- 千葉徳爾 1973. はげ山の文化. 学生社, 東京.
服部 保・南山典子・小川靖彦 2010. 万葉集の植生学的研究. 植生学会誌, 27: 45-61.
服部 保・南山典子・浅見佳世・青木京子 2020. 照葉樹林の基礎情報と歴史. 兵庫自然研究会報告, 5: 1-16.
細見末雄 1992. 古典の植物を探る. 八坂書房, 東京.
岩槻邦男 2010. 生物多様性を生きたる. ノース教養双書, 東京.
木村陽二郎監 1982. 図説草木辞苑. 柏書房, 東京.
木下武司 2010. 万葉植物文化誌. 八坂書房, 東京.
松田 修 1970. 増訂万葉植物新考. 社会思想社, 東京.
宮脇 昭・奥田重俊・望月陸夫編 1983. 日本植生便覧改訂版. 至文堂, 東京.
中西 進校注 1978. 万葉集, 全訳注原文付 (一). 講談社, 東京.
中西 進校注 1980. 万葉集, 全訳注原文付 (二). 講談社, 東京.
中西 進校注 1981. 万葉集, 全訳注原文付 (三). 講談社, 東京.
中西 進校注 1983. 万葉集, 全訳注原文付 (四). 講談社, 東京.
大場達之 1982. 日本の植生. 「土木工学大系」自然環境論(II), 69-210. 彩国社, 東京.
佐々木尚子・高原 光・湯本貴和 2011. 堆積物中の花粉組成からみた京都盆地周辺における里山林の成立過程. 地球環境, 16: 115-127.
山田卓三・中嶋信太郎 1995. 万葉植物事典「万葉植物を読む」. 北隆館, 東京.